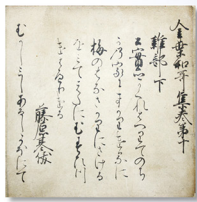
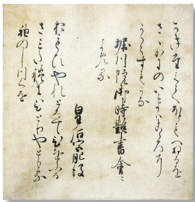
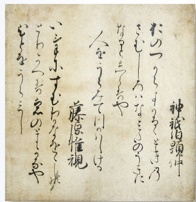


升底切本『金葉和歌集』零巻(巻7~巻10) 1軸



平安時代から鎌倉時代にかけて書写された古典籍は、書籍としての用途のほか、その書の美しさを鑑賞するために1葉(1ページ)ごとに裁断され、軸物(掛け軸)や手鑑(筆跡を集めたアルバム)に仕立てられることがあった。卷子や冊子として伝来した古典籍から切り出された、こうした紙片断簡を古来、古筆あるいは古筆切と呼んでいる。室町末頃には、茶湯の流行にともない茶室の設えとしての掛け物や棚飾としての手鑑の需要が高まり、多くの古写本が裁断されることとなった。豊臣秀吉も公家や寺家伝来の古写本・古写経を裁断し譲り受けて蒐集したコレクターであったという。江戸時代に入ると古筆の蒐集と鑑賞は大流行し、筆跡鑑定に携わる者が古筆家として一家を立てるにいたる。古筆家は、聖武天皇、紀貫之といった著名な人物を典雅な古写断簡の筆者に比定し(多くは根拠の無い推定で、現在ではこうした筆者の名を「伝承筆者」と呼んでいる)、高名な古写断簡には「高野切」のような固有の名称が付された。江戸後期になると、「古筆名葉集」という、古筆の筆者と切名を集めた本も刊行されるほどの裾野の広がりを見る。

本学図書館に所蔵される藤原^{たけいさ}家隆(1198-1275)筆と伝えられる『金葉和歌集』は、通常、藤原^{いよたか}隆(1158-1237)筆と極められ(鑑定され)、「升底切」の名称で珍重される古筆切の依巻(元来一緒だったもの)である。本学図書館では、末尾に付された「^{たけいさ}家卿御若年之時之御真筆」と記される古筆^{りょうさ}了佐(1572-1662)による奥書極(卷子の奥に付された鑑定)により、鎌倉中期頃の書写本としてきたが、2009年度の特許文庫研究費による調査によってその資料性が明らかとなった。升底切は、「古筆名葉集」の「家隆」の項目の筆頭に挙げられ、江戸時代より賞翫されてきた名品であるとともに、鎌倉時代初期書写の、現在知られている『金葉和歌集』伝本のうち最も早い時期の写本と考えられる極めて貴重な資料である。国宝手鑑「藻塩草」(京都国立博物館蔵)ほかの著名な手鑑に所収される40葉ほどが従来知られていたが、この度、一気に数倍の量が出現したこととなる。鎌倉初期に流行した世尊寺流の独特の粘りのある文字で和歌1首を3行に書く紙面は堂々とした風格を湛えており、まさに愛すべき逸品と言える。(元文学部日本語日本文学科准教授 海野圭介)